九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

名詞と動詞のあわい ： 日韓対照言語学の視角から

辻野, 裕紀
Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University : Associate Professor

https://doi.org/10.15017/4104142

出版情報：言語文化論究. 45, pp.45-49, 2020-10-30. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

名詞と動詞のあわい
――日韓対照言語学の視角から――

辻　野　裕　紀

1．はじめに

日本語と韓国語＝朝鮮語（以下「韓国語」と呼ぶ）の間には、興味深い差異が数多く存在するが、本稿では、そのうち、〈名詞と動詞の連続性〉という点に投錨し、「研究ノート」として「覚書」程度のごく簡単な議論を企図する。

堀江薫・パルデシ、プラシャント（2009：133-134）は、日本語は「(1a) 動詞の連体形が終止形としても、直接名詞化形としても機能する[1]」、「(2a) 動詞の連用形が名詞としても機能する」（＝構造的多機能性・不確定性）のに対し、韓国語は「(1b) 連体形と終止形の区別が厳密であり[2]、日本語の直接名詞化形に直接対応する述語の用法はない[3]」、「(2b) 連用形が名詞として用いられることはない」という「事実」を挙げ[4]、「日本語の方が韓国語よりも名詞と動詞の連続性の度合いが高い」と結論する。

また、生越直樹（2018）は、日韓両言語における動作性名詞[5]の振る舞いの差異（e.g. 日本語「今日欠席の田中さん」、韓国語「*오늘 결석의 다나카 씨」）などを挙例し、韓国語と比べて日本語は「名詞と動詞を分ける壁が低い」と表現している。

本稿では、こうした先行研究の指摘を踏まえて、若干の鄙見を表白する。

2．連体形の終止機能および名詞的機能について

まず、日本語の連体形が終止形としても機能するのは、歴史的に旧来の終止形を連体形が駆逐することで生じた現象であって、日本語においても元々は終止形と連体形の峻厳な区別が存在したことは周知の事実である[6]。つまり、連体形と終止形の形態的同一性は日本語の本来的態様ではない。現代語に見られる終止形と連体形の同一化という現象は、連体終止法、いわゆる連体止めの用法が一般化することによって生じたものである。連体止めは上代和歌にすでに詠嘆を表す用法として存在し、中古物語の会話文においては強調的、ないしは情意的ニュアンスを表すものとして、さらにその用法を広げていった[7]。

連体形が名詞的に機能するという点も、其実、韓国語においても観察される。現代韓国語では、이불《布団》、어른《大人》などに化石的に残存するのみだが、後期中世韓国語においては、「威化振旅 hʌ.si.nʌ.ro[8]」（龍歌、11）の如く、連体形に格助詞が直に結合したり、「sir.pirs.'ep.si」（杜初二十五、53）の如く、そのまま名詞として振る舞う実例が散見される。さらに、古代韓国語の郷歌や前期中世韓国語の口訣資料には、連体形に直接格助詞が付く例があまた存在する。その委細について

は、伊藤英人（2012）を参看されたい。

なお、連体形が終止形としても名詞としても用いられるのは、アルタイ諸語において広く目睹される現象である[9]。

斯くして言語史的な水脈を遡航してみると、堀江薫・パルデシ、プラシャント（2009）の（1a）（1b）を、日韓両言語の〈名詞と動詞の連続性〉の度合いの違いの徴憑とするには、再思の必要があると言いうる。

３．連用形の名詞的機能について

日本語の連用形が名詞（転成名詞）として機能することについても、語史的な視角から検討してみよう。阪倉篤義（1990）によれば、上代日本語においては、「a 接尾方式（情態言）」、「i 接尾方式（居体言）」、「u 接尾方式」という名詞構成法が存在した：e.g. √Far、Fara《原》、Fari《墾り》（cf. 新墾り）、Faru《春》。これらは、同時に、その直後に接辞を承接させるための語基（未然形、連用形、終止形）としても各々機能するが、何よりも名詞的に用いられていたということは特筆すべきである。阪倉篤義（1990：291-292）は、情態言の例として、Fara《原》：Faru《墾る》以外に、kuma《隈》：kumu《隠む》、tuka《塚》：tuku《築く》、mura《村》：muru《群る》、wosa《長》：wosu《治す》、tama《珠》：tamu《廻む》、tura《列》：turu《連る》、naFa《縄》：naFu《綯ふ》などを挙げている。また、情態言は、「むかつを」、「ほほまのをか」の如く、助詞を随伴して、名詞を修飾することも可能であった。堀江薫・パルデシ、プラシャント（2009）は、名詞としても機能する活用形を連用形に局限しているが、このような形で通時的に見れば、未然形や終止形も名詞的な職能を有していたということが分かる[10]。この事実は、日本語における〈名詞と動詞の連続性〉を支持するものと言えよう。

翻って、韓国語にこうした、名詞と同形になる活用形（語基[11]）は存在しない[12]。韓国語の連用形（第Ⅲ語基）を作る -아/어- は本来「完了」を表す接尾辞であり、中世語においては基本的に他動詞に付く。自動詞には -거- が付き、-아/어- と -거- は、凡そ相補的な分布を成すものであった[13]。語基論者の言う第Ⅱ語基を作る -으- は、アルタイ諸語やギリヤーク語（ニヴフ語）などに見える、調音のための媒介母音（Bindevokal）であり、-으- 自体には何の意味もなく、第Ⅱ語基が名詞として機能することもない。こうした一連の事実は、伊藤英人（2009）に見られるように、いわゆる「語基論」の否定のために考引されることもある。

なお、名詞形を作る形態素としては、-기と -(으)ㅁがあるが[14]、これらは派生接辞としても語尾としても機能する。一方で、-기と -(으)ㅁには、終止形語尾としての機能もあり、この点で形態的には用言的か体言的かが混濁しうる。

４．動作性名詞の用言的機能について

韓国語においても、動作性名詞が統語論的に用言の如く振る舞うことがある：e.g. 1909년 중국 청도로 망명《1909年、中国青島に亡命》[15]。망명《亡命》は、格助詞をとるという統語論的な面では動詞的だが、形態論的には名詞的である。こうした現象は、付した日本語訳からも分明なように、日本語においても観察される。

5．その他

日本語の場合、「りょうり」から「りょうる」《料理する》、「さうぞく（装束）」から「さうぞく」《よそおう》、「さいしく」から「さいしく」《彩色する》、「よる」から「およる」《寝る：女房詞》が作られたように、名詞を動詞化させた例が古文において散見される[16]（「すもう（相撲）＜すまふ」のように逆に動詞が名詞化した例もある）。かかる例は韓国語にはおそらく存在しないものと思量されるが、신《履物》：신다《履く》などの如く、ゼロ派生的に名詞と動詞語根が共通している例が中世語に見られ、現代語にもいくらか存留している[17]。

6．おわりに

以上の議論を以て、何がしかの結論めいた総括をすることはできない。しかし、本稿で挙げたいくつかの事象は、それぞれ日本語学（日本語史）、韓国語学（韓国語史）の内部では広く共有されている言語事実であるにもかかわらず、対照研究、とりわけ、〈名詞と動詞の連続性〉という議論の中では、管窺の限り、ほとんど言及されていないため、本格的な論攷のためのエスキスとして、驥尾に付して贅文を認(したた)めてみた次第である[18]。

対照研究においては、異なる言語の現代語同士を較量するのが一般的であり、過去の態様については、等閑視されてきた[19]。しかしながら、歴史的にカタバシスすることで、対照する２つの言語の類似点や相違点の本質的総体がより鮮明化、立体化してくることも少なくはないであろう。そうした営みは、決して共時態と通時態の混同ではない。両言語のありのままの姿態を活現させるために不可欠な作業だと言うべきである。

注

1　堀江薫・パルデシ、プラシャント（2009：134）には、「直接名詞化形」の例として、「ひとりで黙々と勉強するより楽しいですよね」という文が挙げられている。

2　ただし、堀江薫・金廷珉（2011）、堀江薫（2016）などで指摘されているように、ウェブのブログなどでは、連体形が終止形のように用いられる用例が見られ、語用論的意味を獲得している。

3　日本語では連体形で現れる「すると同時に」、「するが早いか」といった形式も、韓国語では「함과 동시에」、「하기가 무섭게」の如く、名詞形（体言形）で現出する。なお、名詞形という形を用言のパラダイムの中に別途に有するのは、日本語やアルタイ諸語と対照させたとき、韓国語の特異的な点と言える。

4　(1a)、(1b)、(2a)、(2b) は、筆者が便宜上つけたもの。

5　野間秀樹（1990：32-36）が「活動名詞」、「営為名詞」と呼ぶものに概ね相当すると思われる。

6　因みに、大野晋（1998：111）によれば、一段動詞、二段動詞等に現れる、連体形を表す -ru は、助詞の「ノ」に当たる意味をもっていた。「ヲロチ（大蛇）」、「カムロキ（男神）」、「カムロミ（女神）」の「ロ」と同根の要素である。

7　鈴木泰（1993：46）参照。

8　中世韓国語のハングルのローマ字転写は、福井玲（2013：11）に依拠する。ただし、読みやすさを考慮し、文字境界にピリオドを付す。

9 例えば、満洲語の例については、津曲敏郎（2002：58-61）を参照のこと。
10 已然形や命令形が名詞として用いられることはなかったと思われるが、上代語においては、命令形は固より、已然形も自立的に用いられた。
11 韓国語の「語基」については、菅野裕臣（1997）を参照。
12 ただし、現代語において、살아생전《生きている間》、섞어찌개《チゲの一種》の如く、動詞の連用形が複合名詞の先行要素として名詞的に機能する例も実は絶無ではない。
13 こうしたありようは、古代日本語の「完了」の助動詞「つ」と「ぬ」のそれとも似ている。
14 また、迂言的な後置否定形に現れる - 지も名詞形を作る形態素である。
15 野間秀樹（1990：36-37）に例文として引かれたものを再引用。野間秀樹（1990：36）は、こうした用法を「構文論的には動詞であるにもかかわらず、形の上だけから見ると名詞的でもあって、名詞と動詞の境界的な位置にあるものである」と述べている。
16 小林賢次（1993：108）参照。
17 韓国語の名詞語根と動詞語根の共通性については、安秉禧・李珖鎬（1990：129）、菅野裕臣（1990：345）などを参照。
18 なお、形容詞については、日本語では名詞と形容詞が連続的、韓国語では動詞と形容詞が連続的である。日本語の形容詞は本来は nominal だったが（cf. たか山《高い山》。現在でも琉球語宮古方言に残る）、存在動詞「あり」の力を借りて、用言化する。現代語でも「早起き」、「古本」などのように、形容詞語根（形状言）が複合名詞を形成したり、「おお、さむっ！」のように形容詞語根が単独で用いられたりする点に、日本語の形容詞の本態的な nominal な性質が露呈している（なお、「おお、さむっ！」の如き発話が可能なことについては、キュリオリの言語理論の影響を受けたドルヌ、フランス・小林康夫（2005：184-195）の議論も興味深い）。一方、韓国語の形容詞は verbal であり、一部の活用形を除き、動詞との形態論的な差異もない。この点はアルタイ諸語と大きく異なり、むしろアイヌ語やギリヤーク語に似る。늦봄《晩春》のようなごく少数の例外を除き、韓国語で形容詞語根が直接名詞を修飾することもない。また、*춥！（lit. さむ！）のように、形容詞語根が語尾の支えなしにそのまま現れることも基本的にあり得ないが、当今の SNS などにおいては、形容詞語根単独形の使用がしばしば観察されるようである。
19 仮に触れられていても、事実誤認の場合もある。例えば、堀江薫・パルデシ、プラシャント（2009：160-161）は、日本語の対格助詞「を」が「連体形を受けて句と句を接続する」接続助詞としても使用される点を指摘した上で、韓国語の対格助詞「를/을」と日本語の「を」の最も顕著な相違点として、韓国語の対格助詞には日本語と異なり、接続助詞化、あるいは広義の格表示以外の文法的意味を発展させるという文法化の経路がほとんど認められない点を挙げているが、これは言語事実に違背する。例えば、中世韓国語の「nʌr ～ nir」は、連体形語尾（冠形詞形語尾）「-n」に対格助詞「'ʌr ～ 'ir」が結合して生じたものである。それ以外にも、「-매」はもともと名詞形語尾に処格助詞「'ai」がついたものであり、「-러」（中世語では「-ra」）、「-며」なども連体形語尾や名詞形語尾に格助詞がついて接続形語尾（連結語尾）化したものである。なお、このように、いわゆる動名詞の斜格形が化石化して副動詞形に変転する現象は韓国語のみならず、アルタイ諸語にも広く見られる。

参 考 文 献

安秉禧・李珖鎬（1990）『中世国語文法論』，ソウル：学研社【韓国語文献】
伊藤英人（2009）「「語基説」をめぐって」，油谷幸利先生還暦記念論文集刊行委員会編『朝鮮半島のことばと社会：油谷幸利先生還暦記念論文集』，東京：明石書店
伊藤英人（2012）「古代・前期中世朝鮮語における名詞化」，『東京外国語大学論集』85，東京：東京外国語大学
大野晋（1998）『古典文法質問箱』，東京：角川学芸出版
生越直樹（2018）「日韓対照研究の実践と課題：名詞文の使い方を例に」，『日本語学研究』57，ソウル：韓国日本語学会
菅野裕臣（1990）「朝鮮語：その系統論以前の諸問題」，崎山理編（1990）所収
菅野裕臣（1997）「朝鮮語の語基について」，『日本語と外国語との対照研究Ⅳ 日本語と朝鮮語 下巻 研究論文編』，国立国語研究所，東京：くろしお出版
工藤浩・小林賢次・真田信治・鈴木泰・田中穂積・土岐哲・仁田義雄・畠弘巳・林史典・村木新次郎・山梨正明（1993）『日本語要説』，東京：ひつじ書房
小林賢次（1993）「古代語の語彙・語彙史」，工藤浩他（1993）所収
阪倉篤義（1990）「古代日本語の内的再構：名詞の構成法を中心に」，崎山理編（1990）所収
崎山理編（1990）『日本語の形成』，東京：三省堂
鈴木泰（1993）「古代語の文法・文法史」，工藤浩他（1993）所収
津曲敏郎（2002）『満洲語入門20講』，東京：大学書林
ドルヌ、フランス・小林康夫（2005）『日本語の森を歩いて：フランス語から見た日本語学』，東京：講談社
野間秀樹（1990）「朝鮮語の名詞分類：語彙論・文法論のために」，『朝鮮学報』135，天理：朝鮮学会
福井玲（2013）『韓国語音韻史の探究』，東京：三省堂
堀江薫（2016）「対照語用論」，加藤重広・滝浦真人編『語用論研究法ガイドブック』，東京：ひつじ書房
堀江薫・金廷珉（2011）「日韓語の文末表現に見る語用論的意味変化：機能主義的類型論の観点から」，高田博行・椎名美智・小野寺典子編著『歴史語用論入門：過去のコミュニケーションを復元する』，東京：大修館書店
堀江薫・パルデシ、プラシャント（2009）『言語のタイポロジー：認知類型論のアプローチ』，東京：研究社

【附記】本稿は、九州大学大学院言語文化研究院中国語・韓国語合同 FD（2020年１月18日）での発表論文「名詞と動詞のあわい ── 日韓対照言語学の視角から ──」に若干の加筆修正を施したものである。